

西大寺^{みろくこんどう}弥勒金堂の発掘調査(平城第655次)

都城発掘調査部(平城地区)では、個人住宅の建て替えにともない、西大寺弥勒金堂の発掘調査をおこないました。調査期間は2023年3月1日から4月4日、調査面積は約47㎡です。

西大寺は、天平宝字8年(764)に孝謙太上天皇(のちの称徳天皇)の発願によって建立された大寺院です。現在の西大寺の境内は鎌倉時代に復興された姿を色濃く残していますが、創建期の西大寺はより広大な敷地をもっていました。その遺構は今も市街地の地下に埋もれていますが、発掘調査によって徐々にあきらかになりつつあります。

創建期の西大寺の中核(金堂院)には、薬師金堂と弥勒金堂という二つの金堂が南北に並び、それらが回廊で囲われていました。これまでの発掘調査で、薬師金堂(平城第408・422次調査)や金堂院回廊(平城第505・521次調査)の遺構が確認されており、発掘調査成果や文献の記述をもとにした金堂院の伽藍復元案が『紀要2014』で提示されています。この復元案によると、今回の調査地は弥勒金堂の東北隅部分にあたると考えられますが、弥勒金堂そのものの発掘調査は今回が初めてでした。

発掘調査の結果、調査区全体に建物の基壇が広がり、復元案にかなり近い形で弥勒金堂に関連す

る遺構を検出することができました。基壇の上面には、直径約3mの穴が6基掘られており、規則的な配置や出土遺物から、近世以降に礎石を抜き取った穴であることがわかりました。

さらに断割調査を進めたところ、礎石抜取穴の真下で、基壇構築の前段階に掘られた穴を6基検出しました。こちらは一辺約3m、深さは最大1.4m以上もある大規模なもので、大ぶりの石や瓦を用いながら埋められた状況を確認できました。以上の特徴から、これらの穴は、礎石を据える箇所の地盤改良を目的とした壺地業であると考えられます。

壺地業は、西大寺では薬師金堂や金堂院回廊でもみられる工法ですが、これらは基壇を築いた後に、礎石の据え付けと一連で地業をおこなっています。いっぽう、弥勒金堂の場合は、地業の規模が大きいことにくわえ、地業をおこなってから基壇を構築する点で異なります。この工程の違いは、造営前の地盤の状況や建物構造の違いなどを反映していると考えられます。

今回の調査では、限られた調査面積でしたが、弥勒金堂の遺構が良好な状態で地下に残っていることがわかりました。そして、壺地業の施工後に基壇を構築するという特徴的な工法を採用したこともあきらかとなりました。また、壺地業の配置がわかったことで、弥勒金堂の柱位置を改めて検討することが可能になりました。今回の調査によって、二つの金堂の存在が考古学的にあきらかとなったのは大きな成果です。往時の西大寺金堂院のすがたをよみがえらせるために、調査研究を継続していきますので、今後の進展にどうぞご期待ください。

(都城発掘調査部 田中 龍一)



調査区全景(北から)



礎石抜取穴と壺地業(北東から)